

人と、世界と、つながる立命館

— 意欲を持って学び続ける教育 —

大阪初芝学園は、学校法人立命館と教学提携しています。なかでも、初芝立命館、初芝橋本は、立命館大学・立命館アジア太平洋大学(APU)への提携校として、これまで日本になかった新たな教育展開に挑戦しています。今回は、本年4月に開学したばかりの大阪いばらきキャンパスで、吉田新総長にお話をうかがいました。



立命館総長
立命館大学長
吉田 美喜夫

立命館への思い

今年1月に学校法人立命館の総長に就任されましたが、総長の立命館に対する思いをお聞かせください。

私の経歴から説明いたしますと、1968年、立命館大学法学部に入学し、大学4年間を経て大学院へ進学、その後、産業社会学部の教員に就任し、以後法学部を経て法科大学院に移り、47年間、立命館で生活してきたこととなります。本来であれば今年が定年を迎える年でしたが、昨年、総長選挙で当選し、この1月から就任をしたという次第です。人一倍立命館が大好きだというのはもちろんのことですが、ただ、恩返しをするというだけではなく、この立命館をもっとよくしたい、「立命館にきてよかったな」と思ってもらえるような学園にしていきたい、その責任を極めて重く感じております。

立命館の教育と研究について

立命館は、教学改革・国際化・先端研究へのチャレンジなど学園創造に取り組んでおられます。どのように考えておられますか。

大学の役割には大きく分けると教育と研究の両面があります。もちろんこれらは結びついているものですが、それぞれについてのビジョンをお伝えする必要がありますように思います。教育と研究は大学においては車の両輪のようなものです。この両方についてしっかりと取り組んでいきたいと思っております。

教育面について

これから大学を卒業する学生たちが活躍する社会というものは、今まで以上に世界とつながっています。それは紛れもない事実です。海外へ出て行って活躍する場合は言うまでもなく、国内にいても、世界の情報が居ながらにして手に入るといふ意味では、ますます誰もが世界と結びついている社会になっていくといえます。

これからの社会で活躍できる人材を育てるのが大学の役割となりますが、この時、必要な力とは、コミュニケーション能力、そして、相手を深く理解する力というものではないでしょうか。これらの力は裏を返すと、自分をよく知る、あるいは自分の立ち位置がどうなっているのかを知ることからはじまります。自分の国のこと、故郷(ふるさと)のこと、それから自分が今生活している地域について、その歴史や文化というものをよく知るといふこと、これがあつて初めて深く広いコミュニケーションが国際的にできるのではないかと思います。そういう人物を育てていきたいと思っております。

研究について

立命館大学は文部科学省の科学研究費の補助金では私学第3位の到達点を築いております。このことは立命館の研究というものを評価頂いていることの証だといえるのではないのでしょうか。今後は、このような到達点をさらに高めていきたいと思えます。すでにインド・中国、あるいはアメリカなどの国際的に高いランクの大学と提携して研究や教育をすすめてきております。

大阪いばらきキャンパス(OIC)開設の意義

この4月に大阪いばらきキャンパスが開設され、大阪では大きなインパクトを持って受け止められており、期待が高まっています。OIC開設の目的や意義をお聞かせください。

もともと立命館は衣笠キャンパスを拠点としておりましたが、幸いに滋賀県と草津市から約20万坪(60万平方メートル)の土地を提供していただくことができ、びわこくさつキャンパス(BKC)を展開いたしました。こうして理工学部の教学の充実をはかる物的な条件が整い、情報理工学部や生命科学部・薬学部に加えて、スポーツ健康科学部といった新たな学部の展開など、理系教学の拠点を築くことができたわけです。

そしてこの大阪の新キャンパスでは、大阪の産業・人と結びつくことによって、一段高い立命館の教学を実現させていきます。単に地元との関係にとどまらず、ここをアジア、そして世界へとつながっていくゲートウェイにしたいと考えております。アジアの中に位置する日本は、歴史的にもアジアとの関係が深く、そのつながりを大切にしたいうえで、さらに世界へとつながっていく、そういう出発点・拠点に、この新キャンパスを位置つけていこうと考えております。

またこうしたグローバルな視点と並んで、極めて大切なのがローカルな視点です。

世界で活躍する学生を育てることはもちろん、教育機関として必ずやらなければならないことは、国内で、また場合によってはその出身地に戻って、その地域のために活躍する人材を育てることだと思えます。地域のことをわからずして、また、地域とのつながりを抜きにそうした人材を育てることはできません。

大阪いばらきキャンパスは、地域とのつながりを重視して、施設的にも垣根のないキャンパスにしております。インターンシップやNPO、NGOといったボランティアな活動など、学生が街へ出て学ぶ機会が増え、また地域の人たちも遠慮なく来ていただける、まさにローカルな、皆さんにとつての学びの拠点としたと考えております。



そして、私は三つのキャンパスを、なべて同じにする必要はないと思っております。むしろ、それぞれのキャンパスがその個性をもっと自覚し、そこで学ぶ人たちが、そこにしかないものを吸収することが大事です。三つのキャンパスがお互いに切磋琢磨して、いい意味でライバル関係を築き、競争していかなければならないと思っております。

21世紀の社会に求められる人物・人材像

社会(時代)において必要とされる人物像・人材像についてどのようにお考えでしょうか。また、大学での学びを充実させるために、中等教育で培うべき力はどのような力であるとお考えですか。

従来の学校というものは、学校内で知識を得て、あとは社会へ出た時に、知識を使っていくような関係でした。

ところが、今日のような変化が激しい時代、次々とイノベーションが行われていく時代においては、活躍する場面も国内にとどまらず国際的な場面へと拡大しております。これからの若者はそういう中で生きていく力を身につけなければなりません。知識を得てそれらを使っていくだけでは、もはや間尺に合わない時代になっていくわけです。そこで何が大事なのかといいますと、結局「学び続ける」ということです。

学校だけで学びが完結するのではなく、その後もずっと学び続けていくのは、小さい時からいろいろな変化に感動したり、「不思議だなあ」と思ったものに取り組んだり、ということだと思います。ずっと連続と続くような、一貫性があることが、一番いいと思います。

そういう意味では、知識を得ることはもちろん必要ですが、それ以上に、「学び姿勢・意欲」を育てることが、これからの教育、とりわけ初等中等教育

においては、大事であると思えます。

一貫教育について

立命館では、附属校や提携校を有し、小中高大の一貫教育を展開されておりますが、一貫教育に対するお考えをお聞かせください。

人間の発達には、本来、途切れなく、連続とつながっているものだと思いますが、そうはいっても、まずは小学校、次に中学校というように、それぞれの発達段階に応じた教育プログラムが用意されています。このこと自体は日本だけではなく、世界的に共通するものです。

しかし、もう一方で、やはり「一貫性」というものももう一度考えてみようという動きもあるかと思うんです。小中高を6年3年3年とするのがいいの、4年4年4年とした方が実は人間の発達の点からみているのではないかといった議論がなされています。それぞれ特色ある附属校を擁しているため、いろいろな形態がとれる環境で、教育を行っております。

一貫教育の最大の強みは、受験という次の学校へ進むときに乗り越えなければならぬ壁に対応することを目指す教育から解放されて、本来の発達に応じた、なだらかな成長というものを保障できることにあります。

また、初等中等教育の時期においては偏りのない「円満な人格」の形成が重要ですが、人間が円満に、全面発達するうえでも、受験から解放された自由を最大に生かしていきけることは強みとなります。立命館の場合では、小学校から大学・大学院まですべての種類の学校を持つておりますので、これらをつまみ結びつけることによって一貫教育の良さを最大限に出すことができると自負しております。



大いばらきキャンパス



びわこ・くさつキャンパス



衣笠キャンパス

大阪初芝学園へ期待すること

総長が大阪初芝学園に期待されていることをお聞かせください。

立命館は、いろいろなところと高大連携の協定を締結しておりますが、1つの形態にこだわらず、全国の高校と様々な関係を持ち、それぞれの能力を持つ学生がともに学びあうことによって、これが



次世代で活躍する人材を共に育てましょう。

立命館総長
立命館大学長

吉田 美喜夫

大阪初芝学園
学長

福永 正博

らの時代に応えていく人物を育てていくことができると思っております。

またそういうつながりの中で、大学からは率直な要望をお伝えさせていただき、そして受け入れた以上は責任を持つて育て、社会に送り出して、そういう建設的な関係を築いていきたいと思います。

大阪初芝学園は、立命館が有する5つの提携校の中で唯一大阪に拠点を置き、また和歌山にもその系列校を持つ提携校です。私たちはお互いに相手に対する期待というものを込めて、いい関係をつくっていったらと思っております。

教職員・在校生・保護者へのメッセージ

最後に、教職員や、在校生、保護者のみなさまへのメッセージをお願いいたします。

保護者のみなさまにとって、お子様方は本当にかげがえのない存在だと思います。

ぜひ私どもを信頼していただき、安心して任せていただきたいと思います。

ただし、それはまかせきりというのではなく、保護者の方や、地域との良好な関係が重要になってまいります。みなさま方の期待に応えるというスタンスをとりながら教育に取り組み、その責務を果してまいりたいと思っております。

大阪初芝学園のみならず、さまざまに次世代で活躍する人材を育てていきます。



立命館アジア太平洋大学 (APU)

総長略歴

よしだ みきお
吉田 美喜夫 (生年月日) 1949 (昭和24) 年11月5日

[学 歴]

- 1972年3月 立命館大学一部法学部法学科卒業
- 1974年3月 立命館大学大学院法学研究科民事法専攻博士課程前期課程修了
- 1977年3月 立命館大学大学院法学研究科民事法専攻博士課程後期課程単位取得退学博士 (法学、立命館大学)

[学内職歴]

- 1977年4月 立命館大学法学部非常勤講師
- 1981年4月 立命館大学産業社会学部助教授
- 1990年4月 立命館大学法学部教授
- 2004年4月 立命館大学大学院法務研究科教授 (現在に至る)

[学会活動]

- 日本労働法学会、日本社会保障法学会、民主主義科学者協会法律部会、アジア法学会